

トラック 195-198

インフォーマント：

ル・ポールの97歳のラナヴ氏（男性：1914年12月28日生まれ）

66歳のロジャン氏

【ラナヴ氏】

私は体が今不自由なのは、2年ほど前に朝起きたら、左手が動かせない。何かおかしいと思って医者に行ってレントゲンなど取ってもらったら脳卒中だといわれた。すぐに入院しないといけない、と。入院してしばらくたったら退院したが、少しずつ顔や腕がこわばってきたので、サン・ポールでマッサージしてもらったら、立つことが出来るようになった。今でもマッサージは続いていて、リハビリはいつまでやらないといけないか聞いてみたけど、一生だと。年齢などのせいかもしれないね。ただ、前は（リハビリは）毎日だったが、今は週に2回になった。医者も運動療法士も（リハビリの目的は）回復より（今の状態を）維持することだという。悪化しないようにね。

労働組合の歴史について話そうと思う。私は労組の総連（CGT）の県立連合の幹事をやっていて、レユニオンの総連（CGTR）が結成された時に、第一幹事長も務めた。CGTRの結成は1960年代だった。当、私はフランスでの会議から帰って来たばかりだった。グアドループ、ギアナ、マルティニークは総同盟（la centrale）を結成していたが、フランスの同志たちから「あなたたちは何を待っているのだ、独立する気はないのか」と指摘された。独立させたいとかいうことでないけれど、考えてみてくれと言うことだ。国内からの要求だと、レユニオンの労働者を結集させることは難しいだろう。「私もレユニオンの要求のためにフランス（本土）の労働者を結集させることは難しい」、と彼（＝フランスの同志）は言っていた。それだったらお互いに独立した方が良い。私は県組合の責任者だった。2つか3つの会議にも参加した。その後も招待され続けたが、（県組合は）労働総同盟（CGT）の一部ではなくなった。この（本の）中に、レユニオン労働総同盟（CGTR）はいつ結成されたか触れてあるはずだ。書いてあると思う。1960年代だと思うけど、詳しくは覚えていない。とにかくレユニオン労働総同盟（CGTR）の結成は1960年代だった。それで、労働組合運動はル・ポールで生まれたと言えるだろう。というのも、当時ル・ポールに労働者が集中していたからだ。鉄道員もいたし、その本社はル・ポールにあった。そして、貨物を船から降ろすために港湾労働者（docker）はそれらよりもずっと人数が多かった。例えば、米を（船から）降ろすには人手がかなり必要だっ

たし、それは袋で運んでいたからね。当時ガソリンは 200 リットルのドラム缶で運ばれていたことを覚えている。だから袋やドラムや容器などで運送されていたそれらの貨物を降ろすためにはたくさんの人手が必要だった。今では荷役の近代化や機械化が進んだことで、人手でやることはかなり減った。昔、ポアント・デ・ガレの港では、港湾労働者が 1200 人とか 1500 人という時代があったね。それは昔のことだけれどね。砂糖生産の頃には砂糖を積み込むために港湾労働者は 2500 人もいたよ。すべては手で運ばれていたし機械なんて何もなかったからね。砂糖の荷袋 (balles) は頭に載せて運んでいたものだ。(作業は) 4 人でやっていた。貨物が次々に降ろされて来て。米を例にしよう。(米は) ゴニという麻袋でやって来る。当時の港湾労働者は皆んなクロク (=鉤) という専用の道具を持っていた。彼らはそれぞれクロクの先端を持って、袋を持ち上げて頭に載せていた。そしてそのまま倉庫に入り、倉庫に入ると整理していた。整理もしなくてはならなかった。一日中その繰り返しだった。麻袋の中には 75 から 80 キロ入っていたけれど、戦争中には 100 キロの砂糖袋もあった。港湾労働者は数珠繋ぎになって袋を一つずつ運んでいたことをまだ覚えている。そして、棧橋で袋を巻き上げ機の上に乗せていた。巻き上げ機が一杯になったらクレーンがそれを持ち上げて船倉まで行くんだ。船倉に着いたら逆のことをやる。つまり港湾労働者はまた袋を一つずつ降ろして船倉に積むのさ。こんなやり方だからたくさんの人手が必要だったんだ。

港の本社 (本部) はサン・ドゥニにあった。レユニオン鉄道港社 (CPR) というのがあったんだ。どうやって CPR が作られたか分かるかい? これから説明しよう。一つの会社が線路を敷いたりトンネルを掘ったりするなど、鉄道の敷設を任された。別の会社が港の建設を任された。ところが工事が完成に近づいたところ、両方の会社 (特に港の方の会社だけれど) が倒産した。その時に、当時の政府が CPR という組織を創設して総督 (gouverneur) 直属の組織とした。レユニオンには総督がいたからね。これがル・ポールの最初の労働組織となったわけだ。鉄道はサン・ブノワとサン・ピエールの間を走っていた。そして港はあらゆるものの補給を握っていた。昔、サン・ポール、サン・ピエール、サン・ブノワ、サン・タンドレといった町にはどこでも船が接岸する場所があった。それぞれの船が貨物を降ろしてはまた積んでいた。ところがル・ポールが作られてからは、すべてがそこに集中してしまった。ル・ポールが出来て、鉄道も造られて、それがいわゆる CPR というわけだ。当時のル・ポールの町は分かるかい、何もなかった。味気ない場所だった。漁師はいたけど、彼ら以外は誰もいなかった。人が住み始めたのは、港が作られ、鉄道も本社以外がここに集中してからのことだ。港自体は 1886 年にポアント・デ・ガレが開港したが、鉄道はその二年前の 1884 年に出来ていた。ル・ポールの町はこうやって作られた。しかし住人がいて鉄道や港があったにもかかわらず、

町はラ・ポセシオンの一部だった。鉄道も港もまだなかった頃、ラ・ポセシオンは繁栄している町だったからね。残っているもので私が見たのは壁くらいだけどね。今サッカーグラウンドがあるところの横に壁があったんだ。本当に繁栄している町だったね。それはなんでかという、サン・ドゥニと島の南部、或いは西部の間の交通は、船がラ・ポセシオンに接岸するところから始まっていたからだ。大きいボートでね。ラ・ポセシオンには港がなかったから、船は沖合で積荷をボートに降ろして、それからボートで陸揚げしていた。ラ・ポセシオンやサン・ドゥニから出るためにはボートを使わないといけなかった。でもボートだと、海が荒れていると待つしかなかった。それでレストランやホテルがあちこちにあったわけだ。レンタカーもあった。ラ・ポセシオンはとても繁栄していた。一番繁栄していた町だった。サン・ドゥニの次にね。その後、港や鉄道が出来てからは落ち目になったけれど。港や鉄道の建設が始まった頃、町には工事用の道具のための倉庫があった。港を建設した頃、掘削は鶴嘴で行っていて、それらの道具を安全な場所に入れておく必要があったので、そのために大きな倉庫が建てられた。駅の前にある大きな建物見たことあるかい？ 駅といっても昔の駅のことだけど。ル・ポールの駅は知っているね。市役所の前を通る道の向かいにあった。ちょうどヤシの木が植えてある大通りが横断するところだ、パリ大通り。パリ大通りには昔何もなくて、実は鉄道の駅だった。今残っている向かいの建物はわかるかい。それが倉庫だった。港の周辺の建物は取り壊され、人を住まわせる必要があったので倉庫は住宅になった。倉庫は元々丈夫な建物だったから住宅にしたんだ。その時に管理職も住ませた。技師もね。大きな住宅を4棟建てた。最初は管理職のためだったがそのうち、工事監督もその住宅に住んだ。でも、それ以外の労働者は行き場がなかったので分譲住宅を作った。チタンでね。チタンは知っているね。その分譲住宅はもうなくなっているけど。それからまた分譲住宅を作って、そこに今は土木関係の人が住んでいる。設備関係の人も住んでいる。その後、今でも郵便局の近くにある分譲住宅も建てた。ただそれらの住宅は木造だったから、堅固なものに建て替えた。日雇労働者用の住宅も作った。昔は木造に藁葺き屋根だったけど、コンクリートに建て替えられたり、取り壊されたりした。木造の家の中は暑さが幾らかましだったよ。このような木造住宅は、はじめは1戸2部屋しかなかった。その後改良されて4部屋や5部屋のものも建てられた。ル・ポールの町はこうして生まれたんだ。残念ながら、この話は本の中ではしていないと思う。

以前は、社会福祉なんてものは何もなかった。今は社会保険とかはあるけど、当時はそんなものはなかった。そこでレユニオン鉄道港社（CPR）の労働者たちが最初の共済組合を作り上げた。この共済組合は薬品購入の援助をしていた。医者も薬局も払い戻しなしすべて支払わなければならなかったので共済組合が社会保険の役割を果たしてい

たが、すべてというわけではなかった。この共済組合は医療費の大部分と検診の全額を払い戻していた。死亡時にも葬式代の補助を出していた。共済組合には葬儀用品も揃っていた。棺を覆う幕、霊柩車やらすべてであった。それが最初の共済組合のひとつだ。その組合から権利要求が出て労働組合が生まれたというわけだ。ただそれは今のような組織化された組合ではなく、権利の要求が中心の組合だった。要求が出てくる度に労働者を集めてストをしていた。港や鉄道が機能し始めた時にはストには管理職もいたものだ。日雇労働者の方は、ある季節にだけここに来て、雨期の時には働かなかった。しかしその後、彼らもル・ポールに住み始めた。だからあちこちに藁小屋が建てられた。クール・セニャンやサン・ポール街道に。権利要求と言えば、管理職や監督や専門職は一定の枠内で働いていたが、他の労働者は誰でも雇われていた。だから当時の組合運動は、管理職や監督のための要求が中心になっていて日雇労働者は別扱いだ。日雇労働者は時間給だった。例えば、1日10時間を6日間だ。午前11時に一旦やめて、午後1時に再開して午後6時までで、月曜日から土曜日までだった。雨季の間彼らは栽培（サトウキビ）のため高地にいたが、彼らにとって何の問題もなかった。そのうちだんだん栽培が重要になると行ったり来たりすることができなくなった。だからこっちに定住した人もいたが、彼らはとてもつらい思いをした。彼らはサン・ポールの高地、ボワ・ヌーフとか砂利があるド・ダーヌやサント・テレーズから来ていて、遠くからという訳ではないが、車を持っていなかったからバスに乗らないといけなかった。

そんなこんなで労働組合運動は続いた。ところが底辺にいた日雇労働者が声を上げ始めたんだ。「いつも管理職が儲かっている、俺たちにもくれ」と。どこでも同じことだね。「我々にも、我々にも」というのは。そこで、ストや権利要求運動がある度に、臨時の雇用者のためにいつも少し金を按配していた。しかしそれだけでは不十分だったよ。彼らは元々給与が低かったし。本の中にも書いたけど貧しさは半端ではなかった。60歳、65歳の労働者は引退させられるけど、それは年金無しでね。退職したらどうやって暮らしていくんだよ。だから、家族がいない人は救済院に行くことになる。救済院は市役所の裏手にあったがそこは惨めだったよ。食事は朝11時で米はなし。夜は、冷飯。地面に敷いた麻袋の上に寝ていた。藁なんてなくて麻袋だけ。そのうちムスリムや中国人の商人たちが住み始めた。彼らはここに来て特に店を開いた。中国からやって来た中国人やアジア人たちは食料品を売っていたが、食料品店には何でもそれなりに揃っていた。ムスリムは主に衣類を扱っていた。当時は既製品なんてなくて生地 of 切れ端を売っていた。商人たちがここにやって来ると人々はまともな服を着る必要を感じ始めた。港湾労働者はモレスという少し長めの短パンをはいて裸足で歩いていた。鉄道員でさえ裸足で歩いていた。でも一つ違うのは、鉄道員はガロッシュという木靴を自分たちで作っていた

た。裸足でそれをはいて歩いていた。港湾労働者は裸足だったね。タイヤで靴を作ろうにも車そのものがなかったよ。荷車や牛車はあったけどね。私も学校へは裸足で行っていた記憶がある。裸足で学校へ行っていたんだ。サンダルがやって来たのはその後だ。小学校ではみんな裸足だった。学校の先生の子供以外はね。彼らは靴を履いていた。50, 60年代はみんな裸足だったよ。本ではその話もしている。服のことだけどね。服装には2,3種類あった。裕福な教員や公務員は靴を履いたりネクタイを締めたりしていた。彼らはそれなりに物持ちだと見られていた。次に CPR の労働者は青色か灰色の服を着ていた。日曜日だけは白い服装だった。それは教会にミサに行くためだった。最後に港湾労働者だけけど、モレスを着て裸足だった。日曜日には人によってはもう少しちゃんとした服を着る人もいた。そういう状況だった。

その時に戦争が始まった。第一次世界大戦だ。(前年の) 1913年に鉄道員たちがストを行った。解雇が多かったからだ。それで多くのクレオールたちはマダガスカルに行ってしまった。

その頃マダガスカルでは求人があったからだ。そこで戦争が始まったから権利要求なんてなしになった。生活用品は配給制になったがそれで十分なわけはなかった。第一次世界大戦が終わると労働組合の活動が始まった。つまり、臨時の雇用者は、要求を認めてもらうためには手段を問わないという姿勢を見せたんだ。1936年まで続いたよ。そして、36年にレオン・ルペルヴァンシュを筆頭とする連中が臨時の雇用者も加入できる合同労働組合を結成して大きな成功を収めた。というのも、以前は鉄道と港は部局で分かれていた。路線部局、時刻部局、港湾部局、倉庫部局といった具合に。それで各部局に労働組合があったわけだ。それで36年にそれらを連合させて CPR の合同労働組合というひとつの労働組合になった。これが36年のことだ。最初は名前を「親睦会」にしていたが、それは彼らにとってストをやるためではなく交渉するためだったからだ。ところがあつと言う間にそうではなくなった。CPR の管理者であるレユニオン総督が投げ出したからだ。その時に多少の反発はあったが、多くのはしけ輸送人が特にそうだった。というのもはしけ輸送人はその時はみんな臨時雇いだったからだ。それで彼らは37年にストを始めた。労働組合は36年に結成されていたので、37年にストが起こった時、労働組合はそれを把握していてストはだめだと言ったが翌日始まった。私も参加したよ。権利要求はかなり認められた。例えばその本にも挙げられているが、月々の給料、薬品手当、医療費手当、幾つかの条件での鉄道利用などは認められた。そして身分規程も定められた。それで、労働者を解雇するには幾つかの手続きに従った行政調査が必要となった。以前だったら臨時雇いには何もなかった。朝仕事について、上司が気に入らなければ「お前来てなくていい」ということもあった。組合は即刻臨時雇いも引き受けた

のだ。それが有名な37年のストで最初のゼネストとして8日間続いた。私は仕事をしに来ていて初日は加わらなかった。しかし2日目になって組合が引き受けたので全員がストに参加したのだ。それでそこそこの権利要求が呑まれた。正職員はベースが決まり、植民地付加給も4割ついた。当時の正職員の給料は500フランぐらいだった。税関吏は350フラン。臨時雇いは不定給で月によって200とか250フランだった。またストに入った時私が参加したのは組合が労働者を引き受けたからだ。正職員の給与は改善されて、それは地方公務員に準じたようなものだった。今のように公務員というのにはいなかった。お上に準じた訳だ。それよりもよかったが、4割の植民地手当ては25%に戻されたが他のもので埋め合わされた。それはカテゴリーによる計算表に基づいた月給だった。フランス本国のように15日の有給休暇があったし、雇用保障もあった。つまり、懲戒委員会を通さなければ誰かを解雇することが出来なくなった。昇給についても委員会が出来た。前はボスだったんだ。例えば、ボスの気に入れば時間給で2.5フランもらえたが、あっちでは同じ仕事でも2フランという有様だった。それが統一された訳だ。こうして組合は動き出した。

ところで私の生まれだが、ちょっとややこしいので説明しないと。私の父はここ(ル・ポール)で床屋をしていた。サン・ブノワの娘と結婚して彼女はここにやって来た。ところが最初に生まれる子供は嫁の実家で産む(両親や代父或いは代母などの前で)というのが当時の慣習だった。それで彼女はサン・ブノワに産みに行った。それからここに戻って来たという訳さ。当時出産後40日間は安静にしないとイケないと言われていた。それで41日目にこっちに帰って来た。だから私はル・ポールしか知らない。サン・ブノワは知らない。尤も休暇中にサン・ブノワにいる祖父母の家に行っていたけど。でもそれ以外はずっとル・ポールに住んでいる。

私のオリジンについては知らないが、うちには混血がいるという話は聞いたことがある。母方の名前のクラヴィエットというのは本土の名前で、母の母は本土人の奴隷だった。彼が祖母との間に子供を作ったということなんだ。で、彼が子供を引き取ったという訳だ。しかし本土人は普通ここには留まらないで本土に戻り、子供も連れて行くじゃないか。ところが子供の母親が憲兵と一緒にやって来て船に乗せなかった。それで彼女はここに残ったが、父親はそれでも彼女のために世話を焼き、サン・ブノワに広い土地を買う金を送ったんだ。そこが私の祖母と母が住んでいたところだ。これが母方の生まれの経緯で彼女は広い土地を持って優雅に暮らしていたよ。ヨットまで何艘かあったよ。あちこちに係留してあって船乗りもいたんだ。そこで、ある時(年金)受給者が宴会で羽目はずしてヨットが出てしまい、彼は陸に残された。彼は一銭も持っていなかった。で、わがクラリヴェット家に居候し、その娘と結婚した。だから混血というわけだ。

昔は奴隷制なんかあったけど、とうとう本土人が奴隷の娘と結婚するようになった。父方の方はそういうのではない。サン・ポールにデジャルダンという一族がいて、グロ・ブランだった [本土から来た白人移民の子孫]。彼は娘をサン・ドゥニの学校に通わせた。サン・ポールには学校も何もなかったからね。サン・ドゥニの「無原罪の御やどり」学校だ。私は疑っているが、そこにラナの一族がいたらしい。モーリシャス出身でここに来た一族だ。彼は鍛冶屋として働いていた。大砲見たらろう。サン・ドゥニの海辺の家の中にまだ大砲があったんだ。その砲台で彼は働いていた。私の曾祖父だ。彼には息子がひとりいて看護師になった。で植民地病院があった。県庁舎の別館があるところだ。彼はそこで働いていた。彼は結婚してたくさん息子がいたが、何かを一人前にやりたいというのがひとりいて彼はその子を学校に行かせた。それから公証人事務所に入れた。その時代に公証人だよ。彼は事務所で働いてとうとう公証人にまでなった。この若者がデジャルダンの娘に恋をして二人は結婚した訳だ。デジャルダンというのは本土人の末裔だ。しかしデジャルダンは不寛容で娘に腹を立てた。だが娘の方はそれで幸せだし、夫は働いた。そんな時に義理の母親と娘の間で喧嘩になった。娘は耐えられなかったし、もう大きくなっていたので、義母をぶってしまった。私の祖父がやって来て、自分の母親が血を流しているのを見て逆上した。妻が馴染まなかったので娘たちをそこで育てて教育を受けさせたがうまくいかなかった。仲たがいばかりしていた。妻はまったく心の準備が出来ておらず、不幸なままだった。で、私の父は二人の姉妹と一緒に、おじのデジャルダンのところで大きくなったが、叔父はひとりの姉妹を追い掛け回していたよ。二人ともかわいそうだった。ところがその家名のおかげで道はどこにでも開かれていた。彼は鉄道会社に入って3人の子供を呼び集めた。だが彼は家を空けるんだ。サン・ブノワまで鉄道で行き、夜暗くなってから帰って来るという具合だ。それで子供たちは義母が育てた。これが私の出自だ。父母両方に混血がいたわけだ。

私自身の子供については、最初の子供は死産だった。もう一人の子供も亡くなった。結局私は5人の子供を亡くして、娘ひとり息子がふたり残った。42年に結婚したが、当時は薬なんかなかった。それは封鎖のせいでも薬も食べ物も何もなかったから大変だったよ。子供はみんな高校までやったよ。娘の方は法律を勉強した。多分知っていると思うが、彼女は県議会の部署で働いている。県議会の財務関係だ。二人の息子は選抜試験を受かった。ひとりには郵政でもうひとりには税務署だ。彼らはフランスで任命されて長い間あっちにいたけれど今はここにいる。娘は山の方に住んでいて、息子のひとりにはグラン・タージュ、つまりポセシオンだ。もうひとりの方はここだ。勿論彼らには孫がいるよ。

戦争中のレユニオンは他の場所より大変だった。それは物資を運んでいた列車とも関

係ある。列車はカルティエから出てここまで来ていた。そのあとサント・テレーズから物資を歩いて運んでいたんだ。それで列車が来なくなったら彼らも来なくなったわけだ。ここでは何も生産していないからね。唯一ここで作っていたのはタマネギだった。品質の良いタマネギだったそうだけどね。後は野菜がほんの少しで他には何もなかった。ここまで鉄道は来ていなかったからね。サン・ブノワとサン・ピエールの間に関一日一本走っていたけれど、サン・ブノワから出て夜にサン・ピエールに帰っていた。だから人々はあまり移動できなかった。その時期ここは本当に大変だったよ。

【ロジャン氏】

私もル・ポールで生まれた。母親は白人で父親が私のようなカフルだった。母は南にあるグラン・ボワ出身で、父はサン・ドゥニ出身。私が思うに両親は列車の中で知り合ったのだろう。汽車はサン・ピエールまでしかなく、グラン・ボワまで行くにはバスに乗らないといけなかった。父は倉庫の担当者として港のドックで働いていたが母は働いていなかった。

私は 66 歳だ。6 年前に引退したけどラナヴさんと同じ会社で働いていた。でも私が 1966 年にそこで働き始めた時、彼は一年ぐらいで引退した。つまり私が働き始めてすぐに彼が引退したわけだ。何しろ彼は 97 歳だからね。彼は実際には定年前に引退した。当時の政策が有利だったから引退することにしたらしい。でも今では仕事をしている時よりも忙しいと言っているよ。彼は私が 66 年に入って 67 年には引退したけれど 66 年はフランスで休暇中だったとか。本土に 8 ヶ月もいたらしい。何しろその頃の公務員なんて小金持ちみたいなものだった。公務員は休暇が 5 年ごとに半年あった。そして休暇は普通は船で行っていたよ。船の旅は 3 週間以上かかっていたから、マルセイユに着いた時点で休暇が始まるわけで、航海そのものは休暇には含まれないんだ。行くのに一ヶ月ぐらいかかって、帰るのにもそれぐらいかかっていたから往復だけで合計二ヶ月かかるわけだ。それにあの頃は「郵船会社」だったから、船上で贅沢に過ごせたという話だ。

【ラナヴ氏】

私の休暇の話だが、飛行機を使うのは初めてだった。67 年頃はまだ飛行機が飛んだはしりの頃で、レユニオン飛行機が来るまではまだまだ時間がかかった。だから 705 型機はまだこっちにはなかった。単葉機でマダガスカルまで行って、そこから飛行機に乗ってフランスに行くわけだ。飛行機で家族を本土に連れて行ってあげたよ。私自身は船で帰った。さっき言っていたけどマルセイユから戻るのに一ヶ月もかかって着いた翌日から仕事だった。マルセイユからの船はスエズ運河経由であっちこっち寄ったよ。ジブ

チ、ディエゴ、タマタ、モーリシャスもね。

私は 65 年に兵役についたので船旅は違う条件だった。兵隊は船倉でハンモックの中さ。尤も、船が動いても（ハンモックの中は）動かないからそんなに悪くはなかった。ハンモックの中だと感じないからね。でも、バーなどは行けなかったけどね。軍人は一般の旅行者や公務員とは混ざらなかつたから。あの頃は兵役は 2 年間だったが私は 1 年半だった。

ここでの公務員の話に戻ると、私にはいろいろと役得があつて、さっき言ったように休暇を取ると 6 ヶ月なんだ。それに私は少し長めに働いたから本土に 8 ヶ月いた。公務員はここでは王様だよ。私は満足していた。CFA フランと本土のフランがあつて、CFA フランはフランの倍だった [価値が半分]。でもここでは本土の基準で支払われていたため半分しかもらっていないことになる。その後、公務員は抗議して 65 パーセント増しにしてもらい、さらに 35 パーセント増しになった。これで本土よりかなりいい給料になった。倍だった。いい休暇を過ごしたよ。休暇中は本土をあちこち回つた。マルセイユ、ル・アーヴル、パリなど。パリには住んでいたよ。ランティエ通りに住んでいた。知っているかい。とにかくあっちこち回つたよ。ルルドや北の方へも行った。あっちこち行ったよ。マルセイユやエクス・アン・プロバンスにも。5 年ごとに 6 ヶ月の休暇というのは元々本土のフランス人を対象とした特権だった。以前はレユニオンの公務員と本土の公務員の間でひどい不平等が生じていた。レユニオンの若者の多くは本土に学びに行っていたから、よく本土人の同僚となっていたが、同じ資格を持っていたのに給料は半分だった。国の教育でそれはあまりにひどいということでストがあつた。1 ヶ月の間。50 年代に 1 ヶ月のストだよ。同等の給料を要求し、それ以来やっと本土とレユニオンの公務員の給料差はなくなった。それで状況が少し変わった。でもね、ここだけの話、それはレユニオンを 2 つの階級に分けてしまったんだよ。裕福だと思われた公務員と民間企業にいた人という。民間企業の最低賃金は本土より 35~40 パーセント低かつたよ。そのせいで、公務員が上において他の人は下にいるという二つの世界になってしまった。ただその状況は、差が 2 倍から今の 1.53 倍になるまで少しずつ解消されていった。そして最低賃金はフランス本土と同じ基準になったから、今では差はそうはない。昔は公務員はお大尽だったよ。

【ロジャン氏】

私は 70 年代に公務員になった。だいぶ減らされてはいたけどね。カテゴリー C の施設の係員をやつてつましく暮らしていた。昔の公務員のような生活はできなかったよ。私の知る限りそれほど上級で公務員でも家を 2~3 軒持っていた。でも私が公務員にな

った時には、買取賃貸借（location-vente）の一戸建てに入ったし、それ以上は手に入れられなかったよ。分かるだろう？ 特権が減ったせいでね。要するに当時の状況をまとめると、一方で本土の基準の倍をもらう公務員がいて、他方では最低賃金が本土より少ない民間企業の人がいたわけだ。彼らにはおまけに、本土みたいな家族手当なんてなかった。社会手当もまったくなかった。それに対して公務員は全部もらっていた。彼らは給料に加えて本土みたいに家族手当ももらっていた。昔公務員をやっていた知り合いがいるけど、彼らは家を2~3軒持っていたよ。彼らの話によると、そんなに犠牲を払っているわけではなかったらしい。ルースさんという年寄りの先生がいるけど、石造りの家を建てたそうだよ。大したことでもないように。分かるだろう？ まあ彼は例外で、奥さんも先生をやっていて、給料が二つあったからね。

私は県の施設局（DDE）に雇われてそこで働いていた。工業デザインの知識があったから、当初は製図をする部署に入った。私はサン・ドゥニの工業訓練学校に通っていたが、そこが製図家を養成する唯一の学校だった。それで私は製図家として応募して雇用されたが、丸々一年ぐらい何も仕事がなかった。そうこうするうちに、統計課に働いていた人間が馬鹿なことをして首になり、私は「はい君は統計をやるんだ」と言われた。私はやることがなかったから、統計課に異動されてずっと統計課にいた。その時私は臨時雇用で16年間働いていたが、その後非常勤を正職員にするというミッテランの法律が出た。専門試験を通れば正職員にしなくてはいけないということで、私は製図の心得がまだあったし、それに製図員の場合は特別手当などがあったから事務職員より製図員になった方が有利だった。それでムフィアの高等学校で専門試験を受けた。16年間臨時勤めの後に専門試験を受けて正規の製図員になったわけだ。

【ラナヴ氏】

私は暫定的措置で67年に引退した。管理職の場合60歳ではなく65歳に引退するのが普通だった。でもその時に新しい政令が出て、30年働いた人は引退ができるようになった。だから私は67年に53歳で退職したわけだ。働いた年月よりも年金生活の方が長いよ。

今まで年金は3分の1だったと思う。例えば、30年間働いていたら最長の40年と計算される。当時、40年だと私の年金は給料の80パーセントとなっていたはずだ。それに対して今では75パーセントを超えることはない。ただ私には、子供3人いたから子供がいると手当が追加されていた。それで15パーセント加算されて、80プラス15で合計95パーセントになった。今じゃこんな年金はもうないよ。

【ロジャン氏】

今働いている世代はもう今から年金生活を計画しないとイケない。それに状況が良くなるとは期待できないな。金はもうないんだから。アメリカを見てごらん。退職者の状況を。

彼らはホームレス状態だよ。向こうでは共済組合なんてないからね。それに彼らの年金会社は倒産したし。株の影響でね。大変なことだよ。それにアメリカは今借金をたくさん抱えているし。格好を付けていたけど、結局は見た目だけだったね。ある時は金持ちのふりをしていても、次の瞬間には地に落ちてしまった。アメリカはとにかく融資、融資ばかりだから。

今の公務員には昔みたいな特権はもうないんだよ。それはもうおわりだね。最近聞いた話で、家を買おうとしていた若い先生夫婦が金を借りたかったのだけれど、借金が彼らの収入を超えていることを理由に銀行が断った。信じられないだろう？ というのも退職手当の35%は凍結されていて、追加融資はそれを超えられないからだ。それも近いうちに、遅くとも5年後にはなくなるだろう。

【ラナヴ氏】

戦後の46, 47, 48年頃だった。この空港に到着するとほとんど何もなかった。本土から来ていた警察官の一人がここに残った。他の人たちは帰ったが。その人はまだラ・ポセションに住んでいるよ。ルゴフさんだ。殆ど私と同じ歳で憲兵をやっていた。彼はまだまだ元気でル・ポールまで買い物に来ている。彼は見かけより歳を取っているようには見えないね。彼の息子はロジャンさんより年上だったが亡くなったんだよね。名前はアラン・ルゴフだ。ルゴフさんならもっと色んな話を聞かせてくれるよ。船が来ていたから、警察署はここに必要だった。船員は皆んなここに寄っていて夜は殴り合いもあったはずだ。喧嘩の対策としてだけでなく、パスポート検査のためもあったけれど。憲兵はね、昔は本土出身者ばかりだったよ。彼はまるで農家でのような生活していたよ。大きな中庭で庭いじりとかやっていたが、誰とも付き合いはなかった。今の憲兵たちはあっちこっちで見かけたりするが昔はそんなことはなかった。ルゴフさんは戦後ここにやって来て、ル・ポールの最初の警察署長のような仕事をしていたから彼は色々と知っているんだ。